# 派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017/02/20 ～ 2017/02/28)

1. 勉学の状況

２月２７日より授業が始まりました。第一週はチュートリアルがないため、レクチャーのみで、加えてオリエンテーションなので本格的にジャーナリズムを学んだわけではありませんが、そこでの状況を記します。講義は日本の大学と同じように教員が前に立って授業を行います。スライドを用いて説明するところまでは一緒です。しかし、スライドがレジュメとして配られることはなく、しかもその内容は事前にオンラインで配布される Reading assignments に沿った簡潔なもので、事前に資料を読んでいかないと授業についていけない仕組みになっています。そのため学生は勉強せざるをえない仕組なっています。始業日の昼から図書館は学生であふれています。授業に話を戻すと、講義であっても学生の参加を求められます。出席ではありません。非常に双方向的で頭を使います。その分ついていくのは大変ですが様々な人と意見を交換できるうえに考える力が身につくと考えます。

一つ心配なのは英語です。単語などは日本などで覚えてきたつもりでしたが全く足りず、こちらに来てからも１日１時間は単語に費やしています。早急に語学の障壁を取り払い英語で困ることがないようにする必要があると感じています。そのために友人やホストファミリーとの会話や周りに溢れている英語を全て教材にすることで克服しようと考えています。私の場合は４か月弱しか滞在しないので「語学留学」にならないように必死になる必要があります。そうはいってもネイティブレベルに達することは不可能なので、同じ授業をとっている学友を一人でも多く作り、サポート得たりシナジーが期待できると思います。そのため、彼らに貢献しようとする姿勢も忘れてはならないと思います。思考の部分については時間を割いて勉強し知識を蓄え、自分の考えを彼らにぶつけることが求められると考えます。

勉学に関する環境について、NZ には教育は個人、ひいては社会への投資という考えが日本より強くあるように感じます。実際に私のホストマザーも仕事をしながら同じ大学で勉強しています。また、学校をあげての新入生歓迎イベントが多くあり、一週目は毎日学校でソーセージを配っていました。教育効果とは無縁に見えますが、そこでたくさんのつながりを作ることができました。様々な人が集まる空間でのシナジーを期待していると考えられます。留学生は現地の学生と同じイベントに参加でき、留学生同士だけではなく現地学生とも交流できます。そういった一見教育と関係なさそうなところにも投資ができている点は組織の柔軟性を象徴している言うことができるでしょう。私が努力をしなければならいのは前提ですが、Massey に私の 4 か月投資することで得られるリターンは大きいと期待しています。

2. 生活の状況

まだ来てから一週間なので、特に不満であったり心配していることはありません。ホームステイをしているのですが、ホストファミリーの方々は親切で、家のルールもなく伸び伸びと過ごせます。季節は夏で、昼夜の気温差が大きいと感じます。Wellington は首都ですが、天気が良ければ夜は空一面の星空が広がっています。さすがにこれは驚きました。通学用に自転車を持っていきましたが滞在先が丘の上にあり、毎日自転車で通うのはおっくうなのでやめます。バスにします。しかし、バスも相当にややこしく未だに学校にちゃんと着けません。不満ありました。今では慣れてきたのでそこまで問題ではありません。そういえば料理もそんなに美味しくないです。一番おいしかったのはふらっと立ち寄ったケバブです。

ニュージーランドの方々（以降 Kiwi、ニュージーランド人を指す現地語）は非常に温厚で優しい人が多いです。また親しみやすさは特筆すべきでしょう。日本人があまりにもそうではないだけかもしれませんが。例えば、本屋に辞書を買いに行った際に目当ての品がなく店員さんが違う古本屋を教えてくれました。彼女は Massey の学生だったらしく後日学校で偶然会った際に「辞書は見つかったか」と尋ねてきました。日本だと一度話したことはあっても次ぎに会うときはスルーしがちですが、人のつながりを実感できる国だなと感じました。たいていの店員さんは１００点満点の笑顔で接客してくるので少し戸惑いますが、すぐ慣れます。「お互いが気持ちのいいように行動すれば世界はハッピーじゃん」というような日本では恥ずかしがって誰も持とうとしない気概を Kiwi から感じます。日本人も日本社会のルールを順守するだけではなく、自然の成り行きや理性に従ってもっと自然に生きたほうがいいかなと思います。それが日本の国際化への一歩かなと思いました。つまり、自分たちの文化や慣習への固執からの脱却すべきかなと。日本は普遍的な価値観において、特別に素晴らしい国ではないことに早く社会が気づかなければグローバル化は形だけに終わるのではないでしょうか。ここで日本社会を啓蒙したいわけではないのでこの辺にしておきます。ただそう感じたというだけです。

先日、留学生を対象にしたバスツアーがあり、ウェリントンを回りました。写真はそのときのものです。両方とも Mount Victoria で撮影したものです。上の写真は映画「ホビット」で主人公が黒馬の騎士たちから逃げるシーンが撮影された場所です。下は Mount Victoria Lookout からの眺めです。自然に囲まれて暮らす様子が分かる一枚になっています。リフレッシュしようと思えば、すくそばに大自然が広がっているので問題ないです。

ここまでは来てから一週間で感じたことをつらつらと書きました。クラブ活動などもあって、アウトドア部というのがあるようなので勉強の合間に余裕があれば参加したいです。Wellington には SUSHI が多いので来月はその感想なども書きたいと思います。

# 派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017　3/1/～3/31)

１．勉学の状況

最近では授業中にやっと少しほかの学生と自分の意見をシェアできるようになってきましたが、まだまだ言いたいことは全く言えていません。滞在も残り 2 か月を切ったので何とかしたいと思います。授業も徐々に本格さを増し、面白くなってきています。最近では Facebook のシェア機能について 30 分ほどディベートをしました。ディベートでは身近なトピックから徐々に普遍的な概念の領域に入っていくので非常にわかりやすく、ただ概念的な話をされるだけよりは圧倒的に面白く感じます。これは授業だけに限らず、様々なコミュニケーションに応用できると思います。

自分自身の勉強については全体的な進捗に関してはあまり好ましくありません。メディアに関する理解は深まるものの、メディアと他の関係性や与える影響についての考察や、先行研究に目を通す作業はいまだにできておりません。ただ、毎日勉強していて今の状態なので、無理して新しい領域に手を出すよりもこちらで学べることをしっかりと学ぶことが先なのかなとも思います。日本に帰ってからできることは日本でやろうと思いました。

２．生活の状況

自転車通学再開しました。きっかけはおじさんが雨の中、自分の通学路の坂を上っているのを目撃したことです。（先日、suica のような交通 IC をまっ二つに割っていしまったので、現在は強制的に自転車です。）

Wellington 市内にある日本人が経営する SUSHI を食べに行きました。味は普通ですが日本を思い出させるものでした。

最近気づきましたが、教室にアジアっぽい顔してる人間は私しかいません。自分以外がアジアっぽくないと自分がアジアっぽい顔であることを忘れます。面白いです。英語がまあまあな人も私しかいません。正直、目立ってると思いますが、気にしてません。

徐々に友達も増えつつあります。彼らは自分からランチに誘って友達になりました。彼らは私に普通の友達として接してくれます。特別扱いされないのが心地いいです。友人には本当に恵まれています。考えられないくらい優しい人たちです。人ずれしてなくてとにかく優しいんです。英語では冗談すら言えなくて、こんなに素晴らしい友人を友達を笑わせたいのにできないというもどかしさと日々格闘しています。

人種について生活の中で思うことがありました。それは人間は同じような人といるほうが心地いいのではないか、ということです。学校生活やイベントなどで人々の動きを見ていると、たいてい同じような見た目の人どうしで固まります。

先住民マオリをはじめ多くの人種が混在するこの国の、おそらく人種差別志向の人は限りなくゼロに近いと思います。アジアからの留学生の多くは 1，2 年前から NZ に来て英語の特訓をしてから大学に入るので、流ちょうな英語を話します。言語は決定的な問題とは言えません。やはり見た目や価値観の異質性が問題ではなのかなと思いました。これはあくまでも主観的な情報ですが、イベントで白人っぽい人が 2 人とアジア人っぽいが 1 人で近くにいた場合、ほとんどの場合で白人っぽい人どうしで会話が始まります。逆も同じです。そして自分にもそういう傾向があることに気が付きました。こうした感情が差別へとつながってしまうという現象は、決して肯定はしませんが、起こりうるものであると感じます。

奴隷はいけないんだ、というような分かりやすい差別は歴史の中で多くの人々に理解されてきました。しかし、どの人種であっても同じ人間であるから平等に扱われるべきであるという論理はどうでしょうか。現に身体的な特徴が異なるので、異なるものを同じと思えというのは理解力とそれを許容するだけの心理的な余裕が必要でしょう。NZ でも小さい子供はじっと私という不思議な存在を見つめることがあります。日本では大人達もそろって「ガイジン」を凝視するらしいです。千葉大の留学生から聞きました。

人種差別が無くならないのはそうした本能的かつ潜在的な異質性への恐怖と人種間の平等という複雑な論理が理解される必要があるからだと思います。具体的な事例を挙げて批判してもおそらく世界から人種差別はなくならないと思います。

ここに長くこの話題について書いたのは、これは私が最も関心を寄せていて、卒論のテーマにしようと考えているポピュリズムの台頭と大きく関連していると考えているからです（生活の中で感じたことが勉学にも活きています）。昨今のポピュリズムは保護主義や反移民という形で発露しており、人種もそれ、特にアメリカでのものを研究する上で欠かせない重要なファクターであると考えます。また現代ポピュリズム研究においてその発生原因と克服を考える際にメディアとは切り離して考えることはできないと考えます。

長くなりそうなので無理やりまとめました。全然生活の状況じゃないですけど、生活の中で感じたことと勉学のつながりについて共有したかったです。

# 派遣留学プログラム月間報告書

(報告期間：2017　4/1～4/30)

１．勉学の状況

授業はこれまでとさほど変化はありません。英語力が向上し留学当初に比べると授業から得られるものが増えたと感じています。

授業はインタビュー課題や実際に記事を書いてみる実用的なものとジャーナリズムとは何か存在意義や問題点からジャーナリズムを考察するものに大別できます。ジャーナリズムを動的に静的に学ぶことで、立体的に現実に即した形で学べていると思います。理論や学説だけに偏ってしまうと実世界の一部としてのジャーナリズムの視点に欠けてしまうと思います。

今月考えていたことは、リベラルと保守です。ポピュリズムを考える上でこの概念は欠かせないのではないか、と考えています。リベラルとは人間の理性を重視し、理性によって合理的に考えれば社会はうまく統治されるはずと考えます。一方、保守は伝統や慣習を尊重し、人間が長い歴史の中で培ってきた経験則を社会を統治する基準にする考え方です。メディアは基本的にはリベラルです。なぜならば多くの人を説得しようとした場合、リベラルであるほうが簡単だからです。「同性婚に反対です。なぜなら伝統的でないからです。」より「同性婚に賛成です。なぜなら社会には多様な個人がいて、マイノリティーの権利や自由は他のマジョリティのそれらと同様に認められるべきだからです。」と言ったほうがはるかに説得力を持ちます。リベラルはメディアだけでなく、言論や政治、アカデミズムにおいて常に根底にあり、戦後は一貫してこれに従わなければなりませんでした。戦後の政治はリベラルが力を持ち、社会に変革をもたらしてきたと言えます。

ただし、リベラルの考えは全ての人々に受け入れられるわけではありません。これまで、頭のいい人たちが論理的に社会はこうあるべきと提示して、それを理解できる人々がそれに追随する、ということ繰り返してきました。しかしその結果、変化についてこられた人とそうでない人の間で社会が分断され、ポピュリズムやポスト真実という現象として現代社会に露呈したと考えています。人々がメディアに反発するのはそれがリベラルを蔓延させた立役者であるからではないでしょうか。現代ポピュリズムやポスト真実に見られる人々の思想は保守というより反リベラルとみるのが妥当と思います。そしてこれまでリベラルに抑圧されていた保守は爆発的にその動きを加速させたと考えています。要するに、リベラルによる社会改革は市民の意識の改革に比べて早すぎたために、それが政治的異端や過激な思想や政策に頼ることでで社会を急速に巻き戻そうという流れが働いているのではないでしょうか。言い換えればリベラルによる社会改革が一定の人々が理解できない領域まで到達し彼らが嫌悪を感じている。嫌悪は曖昧な言葉ですが、リベラルを巻き戻す運動をリベラルの視点で合理的に論理的に考察するのは不可能と考えます。

それではリベラルに求められているのは何か。そうした流れを非論理的と嘲笑することではな

いと思います。反リベラルが何を考えているのか、そして彼らが何に不満を持っているのかを真摯に受け止めて熟議していくという姿勢だと思います。反リベラルの広がりは SNS の普及とも切り離せないでしょう。彼らの過熱している理由の一つはは SNS によって自分に都合の良い情報だけを閲覧できるようになったことが大きいと考えます。おそらく、反リベラルから歩み寄ることはないので、リベラルが歩み寄る必要があると考えます。その際に一つ一つを丁寧に説明し、決して頭ごなしに否定することなく、妥協していくしかないでしょう。反リベラルに対して「彼らは分かっていない。明らかに正しいのは私たちだ。」という態度を取り続けていては何も解決しないどころか、社会の分断は深まるばかりでしょう。メディアも同様です。「異端児達が現れました。彼や彼女はこんなにも愚かなことをしています。」という風潮では、何も解決しません。なぜなら異端児達を支持している人たちはそれを知ったうえで支持しているからです。反リベラルはとても大きな力であることを忘れ、それらに再びリベラルのヴェールを被せようとすれば、反発するのは明らかです。両者の冷静な対話こそが新しい政治秩序を形成するうえで不可欠であると考えます。それがどこで、誰が、どのような形で、いつ行われるべきかは全く想像もつきません。これから少しずつ考えます。

２．生活の状況

こちらの学校ではイースターに合わせて？中間休み（mid-break）が私の場合、20 日間もありました。一週間をオーストラリアのメルボルンで、もう一週間を NZ の南島観光に使いました。そして残りはマウンテンバイクです。印象に残っている順に書いていきます。

まず、なんといってもマウンテンバイクで怪我をしたことです。気絶して救急車で運ばれました。さすがに起きたときは少しパニックでした。周りにいた友人が説明してくれましたが、記憶も飛んでいたので何も思い出せませんでした。ただ、保険のシステムって人類が考えた偉大な発明だと心の底から思いました。タダでした。治療費も救急車（二回）とも。怪我をするまではとても楽しかったです。NZ ではどの町でも自然がすぐそばにあり、晴れの日も多いためかアウトドアスポーツが盛んです。MTB やサーフィン、スケートボード、ランニング、カヤック、そしてラグビー。

南島では Nelsom, Christchurch, Queenstown を回りました。カヤックやスカイダイビング、バンジージャンプ、トレッキング、マウンテンバイクなどのアクティビティをはじめ、その場で会う人との会話やおいしい料理など盛りだくさんです。クレジットの利用可能額が 0 になるまで遊びつくしました。

ゲストハウスであった方は仕事を辞めて、一か月の旅行中とのことでした。前職はお医者さんだったそうです。どこの国にも自分探したくなる人っているんだなと思いました。ディスってないです。南島にはそれだけの魅力があります。特におすすめなのは Lake Wanaka です。ここは近くに Queenstown があるため見逃されがちですが、観光客が少なく、Kiwi の家族や落ち着いた人たちがゆっくり時間を過ごす場所のようです。アクティビティあり、湖畔のレストランで昼間からビールなど最高の余暇の過ごし方が待っています。Queenstown も間違いなく良いのですが、こちらは世界中から人がやってきて、来るので昼も夜もまあまあ賑やかです。ナイトライフは Queenstown のほうが楽しいです。

オーストラリアでは友人に会いに Melborne へ行きました。全日程を友人宅に宿泊したのでかなり安く済みました。ありがとうラム。自分も留学しているので感じますが、自分の国に帰ってから友達が自分に会いに来てくれるのはとてもうれしいと思います。それぐらいの友達作りたいですね。ただこれが本当に難しい。授業で会うけれどもそのあと遊んだり飲みに行ったりする仲まで深めるのが難しいです。たぶん、こちらから誘えばいいのでしょうが、尻込みしてしまいます。日本で友達作るときってどうしてたっけ、と最近考えます。また、日本に来て日本にも日本人にも興味がある留学生と友達と友人になるのとはわけが違いますし、現地学生は留学生に対してそこまで興味がありません。本当に難しいです。来る前から想定はしてたのでショックでも悩みでもありませんが、未だに掴めていない現状に少し戸惑っています。みんないい人なのは分かっているのでもどかしさもあります。

4 月はお金が無くなるまで遊んだので、5 月はしっかり勉強します！